

ンボジアの暗黒時代」が始まったと言われている。

度重なる近隣からの侵略から安定を期して、19世紀中ごろにはフランスからの保護を受ける形で植民地化されました。その後、1953年にフランスからの独立を果たしましたが、1970年にクーデターが起こり、再び内戦状態となり、200万人以上とも言われる自国民が虐殺されるなどの混迷を深めていきました。そして1990年代に入り、パリ和平協定の締結により、20年以上にわたる内戦が終結しました。

現在日本からの進出企業は184社、飲食店が200店舗以上。その他留学生など留邦人は3,500人。イオンは現地雇用等最大で5,000人と言われている。また、カンボジアからの日本への国費留学生が1,100人、訪日カンボジア人17,857人で、これは2016年に両国間初の直行便が就航したことによります。

車はほとんどがトヨタ製。バイクの多くはホンダ製、農耕機械はクボタ製が大半を占めておりました。稲作の場合ほとんどが直播ですが、多く収穫すると豊作貧乏となってしまう、商品作物はあまり作らないような傾向にありました。

カンボジアからの日本への実習生は農業と工業が大半ですが、最近では介護分野への要請が増加傾向にありました。

社会保険制度は基本的にはなく、国民の最後の砦はお寺であるとのことであり、子供たちに文字を教えるのもお寺であり、国として成り立ってからはまだ

25年しかたっておりません。

カンボジア人に人気が高い日本の都市は北海道であり、これは「雪」がきれいだと言う事のようにあります。

当町も大いに期待が出来るのではないかと感じた次第であります。大使館での行動等につきましては、堀恒平二等書記官にお世話になった次第であります。

昼食をはさんで13時より、トゥーン・スレン収容所を見学しました。当時クメール・ルージュ支配下のカンボジアで、政治犯収容所として設けられていましたが、現在は博物館として一般に公開されております。1976年4月頃から2年9か月の間に14,000〜20,000人収容されていたとされ、最終的に発見された時は生存者がわずか7名であったとされております。その内の数名が今も博物館周辺で語り部として当時の様子を伝えていました。



トゥーン・スレン収容所見学

15時からは、カンボジア技能実習生の送り出し機関「アイアイエス（IIS）日本語トレーニングセンター」を視察しました。2008年10月に設立し、政府

労働省の許可、職業訓練ライセンス等を取得。2015年3月から日本語トレーニングセンターを開設し、昨年3月には累計300人以上の送り出しを実現しております。

取り組みの状況について、ポーコムサン校長と日本支局長の荒川高光さんから伺いました。初めに人材発掘の基準として、素直さ・地頭の良さ・年齢20〜30歳程度まで・親が存在し同意していることを条件に、2段階面接の1次試験を実施。良さそうな場合、家族に連絡して同意を得たり、トレーニングに対する心構えを確認。次に2段階面接の2次試験を実施します。ここで、受け入れを希望している日本の事業者が面接し、合格した場合5カ月から6カ月のトレーニングに入ることとなります。この費用は全寮制で1人6,000ドル。日本円で約70万円。修了試験に合格した場合、約1カ月の派遣準備期間を経ていよいよ派遣され、3年間の実習となる訳であります。

再入国手続きについては、一定の条件を満たした場合に、更に2年の実習期間追加が可能とのことでありました。

業種は21職種25作業で、農業、建設、食品製造、縫製関係、機械金属、溶接、プラスチック成形、自動車整備などで、東北での例はありませんが、新潟県でマイタケ製造に実績があるとのことでした。実習期間は、人財育成支援部において、実習生及び事業所のサポートとフォローをしており、2名の通訳と日本人スタッフ4名体制で対応しているとのことでありました。



IISカンボジア人技能実習養成所「日本語トレーニング」

当町としては、今後介護・福祉の現場や、保育スタッフ、観光施設等での人材不足が懸念されることから、公的機関への実習も可能なのか探って行きたいと考えた次第であります。



カンボジアが旧宗主国フランスから独立したときに建てられた記念塔

(12月号へ続く)

次号では、アンコールワット、アンコールトムなどを含むアンコール遺跡群の観光拠点であるシェリムアップ州（カンボジア）での視察研修。秋田県主催のタイでのトップセールス等について報告いたします。